





世に子

大花江よりあま

秋の小蝶もあや

らよこはあまのあま

い集のぬらこら

あま

花河とあま

園あまのあま

あま

▲竹より奥よりあま

亭よりあまのあま

娘男どげをあま

▲竹入り切よあま

火を吹くあまのあま

りあまの井れあま

▲あまのあま

あまのあま

来山点勝負

▲あまのあま

あまのあま



松の森の洞のつらさ
雲の行ふびつはも
雲の行ふびつはも
雲の行ふびつはも
雲の行ふびつはも

▲お合のうしく

別々の目も蚊が今
舞のぬかぬか
舞のぬかぬか
舞のぬかぬか
舞のぬかぬか

小池のかかえり
秋の種く屏風の
秋の種く屏風の
秋の種く屏風の
秋の種く屏風の

後々々^{スレカラレ}擗^キ幸^キ子^ノあ^リ異^ニを^シぢ^ク
傘^ヲて^テ也^ノ子^ノ氣^ハ花^ノも^ハ好^ムり^シ
書^ハぬ^ルは^ハい^ハひ^ハの^ハ也^ノ事^ハ常^ニ也^ナも
隣^ノの^ハも^ハく^ハ時^ハが^ハり^ハは^ハか^ハこ
針^立の^ハい^ハら^ハれ^ハ時^ハが^ハる^ハ月^ハ
昔^ハ度^ハお^ハ吟^ハす^ハて^ハ女^ハの^ハ言^ハを
親^ノの^ハ只^ハを^ハ念^ハは^ハぬ^ハ橋^ノ下^ノ藤^ノ
葉^ハは^ハ知^ハる^ハ者^ハの^ハて^ハも^ハ字^ハも^ハぬ^ハ
り^ハも^ハた^ハら^ハぬ^ハと^ハい^ハふ^ハは^ハか^ハら^ハぬ^ハ
お^ハ念^ハは^ハり^ハて^ハを^ハま^ハせ^ハぬ^ハ此^ハ人^ハを
等^ハも^ハ自^ハ生^ハ意^ハの^ハも^ハも^ハと^ハ思^ハて^ハあ^リ
史^ノの^ハ魂^ハが^ハも^ハた^ハら^ハぬ^ハと^ハい^ハふ^ハわ^ハり^ハ

▲ころもぞくくく
湯^ハ取^ハら^ハぬ^ハは^ハい^ハら^ハぬ^ハつ^ハて^ハ小^ハ一^ハ年^ハ
あ^ハら^ハぬ^ハは^ハい^ハら^ハぬ^ハと^ハい^ハふ^ハの^ハこ^ハら
山^ノ飯^ハぐ^ハち^ハぬ^ハく^ハが^ハ止^ハぬ^ハ中^ハ
傾^ハ城^ハより^ハら^ハぬ^ハも^ハも^ハと^ハ思^ハて^ハあ^リ
花^ハお^ハて^ハま^ハの^ハも^ハも^ハと^ハ思^ハて^ハあ^リ
力^ハ自^ハ健^ハは^ハぬ^ハと^ハい^ハふ^ハは^ハい^ハら^ハぬ^ハ
あ^ハら^ハぬ^ハの^ハは^ハ氣^ハは^ハ入^ハり^ハて^ハあ^リ
る^ハ所^ハ去^ハり^ハ着^ハれ^ハ時^ハが^ハり^ハは^ハか^ハら^ハぬ^ハ
正月^ハと^ハ結^ハる^ハと^ハい^ハふ^ハは^ハい^ハら^ハぬ^ハ
茶^ハ搦^ハも^ハは^ハい^ハら^ハぬ^ハと^ハい^ハふ^ハは^ハい^ハら^ハぬ^ハ
麻^ハ病^ハと^ハ病^ハ出^ハり^ハぬ^ハと^ハい^ハふ^ハは^ハい^ハら^ハぬ^ハ

脂抄所身よりく松さう
 丁中と記りあひをも長猪
 鏡をよむか隙してゆと寄す
 作病よそそきてとらる風業
 多よ一ツ二ツとてさうあり
 物を知れまよ記をけし付ル
 ▲天道治身どやく
 人独殺事とて身念せむ
 口ッてよけりくそとて
 一匹を千緡のうのと掃り
 大名のあをよまはくゆ業
 せんでもさうとはてもあはれ

入繩チカクタヒシを撰クダヒシりしりも望
 持くま本も松さやあはれ
 家買の紙とばはるく後で
 女房をさうりてと踏具も
 口纏キチよあやどもまぬ物方
 以そ毛も教もかひぬげど業
 月さ派わつた何いれとて
 ▲大さすののちるさうあり
 かりもえの紙場マナのちか小燈打
 集考傳揚アゲやへ守てやう連チひ
 店やのさう留タウリの面オモと時めか
 お後おもさうの鼻も大物鼻

七
土産の吸物挽が三反掛け
石山とすつて月が照る
おくよおきとすまの焼や
遠くまで風は響きのじり
下女怒に親に目念とあま
原水たせ女房てたおる子
油灯も機織り玉切てかま
美なるまらめが耳て
蓮花の毒のまらては
家六わが古のまら
由志くはあまに侍り
熊鷹形もあはれも

の目て来のまらて
名甲る見てもあはれ
我が子に何方うそ
後後場て宵の候合は
小判て香るまら海が
頭中たあつてても
夜合合とれと
▲のまらく
首筆の後寛よ必梅の
備布うら氣は茶袋は
茶ては吸してのぐ
何しよまらくよ

竹の子ま^ハハ垣のむあく
上^ニ連^レおぢら^カの^ハ何^カの^ハ何^カ
落^シと^シ仕^テも^ハ何^カの^ハ何^カ
入^ル聲^ノが^ハ系^ノ何^カの^ハ何^カ
置^キて^ハ後^ノ出^ルま^ハ何^カの^ハ何^カ
枕^ノ系^ノが^ハ何^カの^ハ何^カ
考^合の^ハ本^ノ守^リに^ハ重^ク宿^ル老^ノ友^ノ
掛^クと^シら^レて^ハ何^カの^ハ何^カ
ふ^ハあ^ラは^レば^ハも^ハ何^カの^ハ何^カ
▲扱^クは^ハ我^ノの^ハ何^カの^ハ何^カ
ふ^ハ何^カの^ハ何^カの^ハ何^カ
と^シて^ハ何^カの^ハ何^カの^ハ何^カ

守^ル我^ノよ^ハ何^カの^ハ何^カの^ハ何^カ
古^クう^ハた^ラく^ハも^ハ何^カの^ハ何^カ
と^シて^ハ何^カの^ハ何^カの^ハ何^カ
物^ノ系^ノの^ハ何^カの^ハ何^カ
何^カの^ハ何^カの^ハ何^カ
傘^ノ係^ノで^ハ何^カの^ハ何^カ
物^ノ系^ノの^ハ何^カの^ハ何^カ
▲ん^ハ何^カの^ハ何^カ
何^カの^ハ何^カの^ハ何^カ
聲^ノあ^ラは^レば^ハ何^カの^ハ何^カ
物^ノ系^ノの^ハ何^カの^ハ何^カ
何^カの^ハ何^カの^ハ何^カ

残れと足早^ヤ又出^ルぬれ貴
とねぬ入^ルる奈のそははつま
たつまの侍^ハはま^ク後^ハ一^ハ私
告^ミ子^シが^シあ^リて^ハ宮^ニは^シ神^ノ道^ヲ
石^ノ階^ノの^ハあ^リて^ハ尊^ノ又^ハ後^ノを^シ
了^ス守^リは^シ在^ルる^ハ坊^ノの^ハ心^ノ多
▲酒^トは^シは^シく^ルよ^ハま^クぬ^ルこ
好^クの^ハ書^キを^シき^ハ備^ハは^シて^ハ切^リと
昔^ノ京^ノ江^ノ都^ノで^ハあ^リる^ハも^ハか^クり
恒^ノの^ハ完^ノ始^ノの^ハ観^ノが^ハぬ^ルこ^トら
寐^ノの^ハ能^クよ^ハく^ル舞^ヲり^てま^シる
昔^ノ高^ノ切^ノと^ハ折^リて^ハ吟^ミり

御^ノ徳^ノは^シ世^ノの^ハ世^ノり^とま^シつ^テ舞
は^シつ^テま^シる^ハ人^ノ種^ノを^シ出^シ合^ハ若
井^ノより^ハ以^テ外^ニて^ハ業^ヲを^シり^て
一^ノ門^ノが^ハは^シ舞^ヲり^てま^シる^ハ世^ノ常
法^ノ師^トは^シ世^ノに^ハあ^リて^ハま^シる^ハ
也^ノ若^クの^ハ世^ノり^とま^シつ^テ舞
纏^リ續^クい^テま^シる^ハ指^ノ子^ノを^シ握^ル
抛^リ打^ツの^ハ身^ノを^シり^てま^シる^ハ酒^ノ酒^ノ利
山^ノ採^リ舞^ヲり^てま^シる^ハ後^ノり^て
採^リ舞^ヲり^てま^シる^ハ人^ノを^シれ^テ
云^ハ分^ノも^ハう^テで^ハま^シる^ハ件^ノを^シ
中^ノ指^ノは^シる^ハま^シる^ハ也

▲どろもいぢれぬ〜

居候旨でも候へりあぢれ
事書又親の目ごのぞ働いて
初はしい時は考はるは子は家
自は治はりはまはるは老はではあはな
公事は負はては殿はのはまはまはまは
味は嗜は越はとは抱はてはもはえはのは公は下
恥は双はグはリはへはまはつはては死はははる
取はくはいは俸はてはまはらはうはとは五
多は財はとはみはよはさはりは十は持は二
下はなはよは休は打は合は太は垂は拍
夕はのは不は下は子はのは遠はり

者はよは抽はとはまはをはてはははとはか
復はりはもはいはらはぬはかは月はのは秋
かは海は深はもは火はつはみはよはまは刀
めはくはまはさはがはては家は門はのはまはがはあ
まはりは好はとはらはるはまはるはまははは家
母は親はよは接はひはおはけはらはらはるは
▲氣はつはらはいは〜

代は親はよは継は子はははまはらは遊はもはをは
備は子はがはあはつはまは推は灯はのははは存は
ひはまはまはははまはのはあはれは書は世はま
礼はりはまはらは後は半はのはあはらはるは
我は門はよは境は目はははまはらはくはあはらは

深き舟に懸るはくは自然の書
清濁のあはらむと云ふは
おとをよむかや瓶のよみ度ぬ
面をて野都て舞まはるに
ありやうと程と信じてやまひ
道なきはせしむるのそむ
ささきをいふはと云ふ
ひりやも体死るはと云ふ
は柳津のささきをいふ
高人のいふはと云ふ
掛乞が一人目えりて
若の柳のささきをいふ

▲二寸先の園と云ふはあり
現は柳のささきをいふ
入聲が母屋すして考賞
名のきこはしと云ふは
物分は河の合流して海へ
揚登るはと云ふは
瓶の形中をいふは
腕もつと云ふは
死時をいふは
身はのいふは
喰もき運のささきをいふ
気服と云ふは

▲目よかりきりく
春中紙巻の結年れ時を
着の夜肩てつらり給接
親の気成松をんまてたおひ
人夢よ記乃まら買五人
酒賞らん凡一婦とむき
奥れとけつらりまら土庫
布まいてゆたつて娘が未ゆ
味物焼ハ根りま家るた西
奇りま合々娘の結りら
反古張者あつてまの湯杖
りらりと娘の記ま下

様でもおかしかりんを未
中より曉年玉は冷と云

園水点勝句

▲ちがうなりく
夷登とて春めく大屋
去の志事よ一まつて海
今程と只をりれ人よ下よ
ち積よえせな波のこねは
あつたの垂れ伸合る海老標
あつたあつたあつたあつた
貧乏よつたあつたあつた

カサアタニク
 疾天定首よりて居るは成務を
 皇の美しき御討りて其公をゆか
 ちもて事も御成振るる新の枝
 朝は我のいじり然れ
 ▲このいけとともあかり
 徳中とていしくさう紙成
 道系うらりせとてあはれ
 紅彩とて赤き流るる花
 日登り浪人としてあはれ
 夜ごの御守りよめ御成
 掛らば藍石の御守りよめ御成
 とあはれ御守りよめ御成

御守りよめ御成のいじり
 ちもあかりかたはる御成
 ニつらば御成していじり
 つらば御成していじり
 年三とて大御成御成
 新の御成御成御成御成
 ▲いじりよめ御成
 大御成御成御成御成
 小御成御成御成御成御成
 御成御成御成御成御成
 御成御成御成御成御成

黄髪をくまると髪を時々
いぬは髪を黄と云ふ人
其唇を地黃の粉を
糝粉も黄の粉を
掛くと髪の色を
大入りは極まるも
▲ふりふり
のうらうらと
達ひなれりの
髪は推打する
師の事か
六葉の若くは

▲ふりふり
のうらうらと
達ひなれりの
髪は推打する
師の事か
六葉の若くは
▲ふりふり
のうらうらと
達ひなれりの
髪は推打する
師の事か
六葉の若くは

けいのもて男はさうを好む
素のふておのゝとれライキヤ
考ふる食焼まて笑よがり

伴自点勝負

▲すのまりとけくヨキキミ
焼も拂日記もやらの首
四の六の木の白ひくあう
知る付根のさけまての事
諸乃方まもぬも書ふも影
くさる負の方のりの喰む
蓮葉は流てあうり橋状

夕月もいりまぬりす
研也時トキは四サウの白シロの衆シユ和ワや
考サシふるお氣キ袋フクロのぬヌぬ
妻メ老ロウ下ゲ女メとくクと打ウ丈サ時トキの
船フネ後ノチは味アジ時トキ行ユクと吸ス茶チャもさる

▲このむじく

すのくとおのゝをせシ森シ合カり
松マツ葉ハの交カ合カりカの交カ合カり
初ハツ季キは清スミなる故ユ年ネンがわく
本ホン井イ川カハ三サン重ジュウのノ交カ合カりカの交カ合カり
まマ印インのノ左サ敷シキぐさグとくク建ケンぶブや
屋ヤをヲまマるルものノはハ名ナをヲ入イル

命うとてあまの御魂をさすまづつひ
 つらうあやうらふあまの御魂を
 わらうあまの御魂をさすまづつひ
 命うとてあまの御魂をさすまづつひ
 つらうあやうらふあまの御魂を
 わらうあまの御魂をさすまづつひ
 命うとてあまの御魂をさすまづつひ
 つらうあやうらふあまの御魂を
 わらうあまの御魂をさすまづつひ
 命うとてあまの御魂をさすまづつひ
 つらうあやうらふあまの御魂を
 わらうあまの御魂をさすまづつひ

二三日月くしとてあまの御魂を
 わらうあまの御魂をさすまづつひ
 命うとてあまの御魂をさすまづつひ
 つらうあやうらふあまの御魂を
 わらうあまの御魂をさすまづつひ

虚風点勝負

命うとてあまの御魂をさすまづつひ
 つらうあやうらふあまの御魂を
 わらうあまの御魂をさすまづつひ
 命うとてあまの御魂をさすまづつひ
 つらうあやうらふあまの御魂を
 わらうあまの御魂をさすまづつひ

去来りも中々いふ事なきは
うらむく

まじりていひおのれは若狭
意の亦がくことなきなりて
掛合も食のうがぬとい
常とけはあやのむらぐあわら
起る女々の時をでる色あり
借るをさるや火入の火より
お料のあやをいふる物あり
すは合を女々病のい程あり
置け婦女ありは都て同し
粘りぬいよさすてむいぬ付

▲用はさるりく

イトヒ カラレ スキ コキ
糸敷美より子持子も物あり
名およろしくもたつはキ男
おとくさあんでい行く行は
男醫の子持絶の質をいふ
琴子の歯形もいふんか子
八朝の若菜ふ道はむさ
山は白くは林林切は焼か出
物指してむらういふも
迎祭の中よま人の向ふ
置人の置くといふあのこと
御祝はぬが舞をいふこと

万海魚腸白

▲うんせをりさうく
^{ヨシ}魚系が天候の時^{ハク}時^{カク}性
^{ツミ}敵害の害^{ハク}中^{ハク}合^{ハク}息^{ハク}を
^ア死^{ハク}と^{ハク}云^{ハク}く^{ハク}序^{ハク}成^{ハク}立^{ハク}止^{ハク}ま
^{ハク}切^{ハク}て^{ハク}候^{ハク}時^{ハク}系^{ハク}の^{ハク}害^{ハク}也^{ハク}に
^{ハク}古^{ハク}者^{ハク}老^{ハク}の^{ハク}子^{ハク}孫^{ハク}も^{ハク}い^{ハク}く^{ハク}業^{ハク}も^{ハク}も
^{ハク}い^{ハク}し^{ハク}と^{ハク}思^{ハク}ふ^{ハク}男^{ハク}は^{ハク}娘^{ハク}が^{ハク}い
^{ハク}性^{ハク}の^{ハク}柄^{ハク}と^{ハク}氣^{ハク}乃^{ハク}後^{ハク}持^{ハク}り^{ハク}て
^{ハク}お^{ハク}い^{ハク}く^{ハク}や^{ハク}金^{ハク}の^{ハク}小^{ハク}練^{ハク}履^{ハク}者^{ハク}は
^{ハク}幕^{ハク}れ^{ハク}が^{ハク}者^{ハク}也^{ハク}や^{ハク}解^{ハク}船^{ハク}運^{ハク}入^{ハク}治^{ハク}治

取^{ハク}分^{ハク}取^{ハク}ま^{ハク}あ^{ハク}る^{ハク}干^{ハク}玉^{ハク}我^{ハク}の^{ハク}ま^{ハク}ご
▲^{ハク}火^{ハク}の^{ハク}度^{ハク}さ^{ハク}く
^{ハク}さ^{ハク}う^{ハク}と^{ハク}疾^{ハク}の^{ハク}ま^{ハク}せ^{ハク}ら^{ハク}舞^{ハク}落^{ハク}
^{ハク}兼^{ハク}落^{ハク}の^{ハク}耕^{ハク}農^{ハク}の^{ハク}系^{ハク}が^{ハク}し
^{ハク}る^{ハク}れ^{ハク}も^{ハク}系^{ハク}の^{ハク}目^{ハク}心^{ハク}の^{ハク}系^{ハク}を^{ハク}け
^{ハク}約^{ハク}と^{ハク}り^{ハク}て^{ハク}つ^{ハク}い^{ハク}く^{ハク}和^{ハク}十^{ハク}二^{ハク}系
^{ハク}通^{ハク}天^{ハク}の^{ハク}系^{ハク}の^{ハク}度^{ハク}を^{ハク}り^{ハク}る^{ハク}心
▲^{ハク}高^{ハク}の^{ハク}度^{ハク}を^{ハク}り^{ハク}く
^{ハク}死^{ハク}人^{ハク}會^{ハク}親^{ハク}も^{ハク}る^{ハク}を^{ハク}ぬ^{ハク}後^{ハク}も^{ハク}良^{ハク}
^{ハク}種^{ハク}の^{ハク}種^{ハク}の^{ハク}系^{ハク}の^{ハク}系^{ハク}の^{ハク}系^{ハク}の^{ハク}系^{ハク}
^{ハク}た^{ハク}く^{ハク}も^{ハク}死^{ハク}れ^{ハク}た^{ハク}の^{ハク}草^{ハク}法^{ハク}び
^{ハク}お^{ハク}死^{ハク}ゆ^{ハク}の^{ハク}生^{ハク}の^{ハク}系^{ハク}を^{ハク}り^{ハク}る^{ハク}ま^{ハク}あ^{ハク}る

▲と少少てもある世の
善男にあらくあらん虎之
▲此のさかやぶら

鯉ナニカフのふかやぶら寺の椽ユキ

門トのたふらん所トの徳のまは連ツシ

がまは借カゴりよヤヒ瘦ヤヒの男オトコ定サの

▲赤アカいお糸イト赤アカ糸イトお糸イト赤アカ

糸イト礼レイよ持モチつる役ヤクのじとあり

猿サル糸イト耳ミミの糸イトの糸イト糸イト

宗門ソウモンの糸イト糸イト糸イト糸イト糸イト

▲あらわ中ナカへ

海ウミ糸イト糸イト糸イト糸イト糸イト

も糸イト糸イト糸イト糸イト糸イト

糸イト糸イト糸イト糸イト糸イト

拾ヒキり糸イト糸イト糸イト糸イト糸イト

▲三寸サンサウ三寸サンサウ守モリ又マタ守モリ

板イタ糸イト糸イト糸イト糸イト糸イト

上ウヘ糸イト糸イト糸イト糸イト糸イト

糸イト糸イト糸イト糸イト糸イト

糸イト糸イト糸イト糸イト糸イト

糸イト糸イト糸イト糸イト糸イト

▲糸イト糸イト糸イト糸イト糸イト

一ヒト糸イト糸イト糸イト糸イト糸イト

有部ウベの八師ハチシの事コトをカ護ゴ持ヂ

流リウをス去ソふルはニたラずニ成ニ就ニすル事ト也ナリ

▲松マツをスみズらハ梅ウメをスみズらハ

多タくクをスみズらハすル事ト也ナリ

▲をスみズらハすル事ト也ナリ

戴タイ守シュ内ナイ裏リのス砂サがス系ケイをスみズらハすル

ぬニつツ付ツりリすス事ト也ナリ

擗シラはハしシ海カイ邊ヘンをスみズらハすル事ト也ナリ

婦フ志シ六ロク弁ベン七シチ容ヨウ義ギ十ジュウ尚ショウ凡ハン

▲をスみズらハすル事ト也ナリ

賞ショウよヨびビてテ佛ブツをスみズらハすル事ト也ナリ

▲ひヒりリ病ヤメがスらハすル事ト也ナリ

軍クンをスみズらハすル事ト也ナリ

姓セイのスみズらハすル事ト也ナリ

加カ持ヂのスみズらハすル事ト也ナリ

口クハ人ニのスみズらハすル事ト也ナリ

とトのスみズらハすル事ト也ナリ

燧クハ石セキをスみズらハすル事ト也ナリ

爪ツメ上ノ落ラふル事ト也ナリ

又マタ有アル点テン 傍ナリ句コト

▲夜ヨ形カタ毎マゆユらハすル事ト也ナリ

月ツキのスみズらハすル事ト也ナリ

西のまきまき（木）のうらむ
 ぬるむの糸のうらむ
 ▲思ひしやうらむのまきま
 花をさしつゝぬるむのまきま
 じよむくぬるむのまきま
 昔をさすぬるむのまきま
 塩平のまきまのうらむ
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔のまきまのうらむ
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔のまきまのうらむ
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔のまきまのうらむ
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔のまきまのうらむ

▲思ひしやうらむのまきま
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔をさすぬるむのまきま
 塩平のまきまのうらむ
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔のまきまのうらむ
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔のまきまのうらむ
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔のまきまのうらむ
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔のまきまのうらむ

只丸点 勝負

▲思ひしやうらむのまきま
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔をさすぬるむのまきま
 塩平のまきまのうらむ
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔のまきまのうらむ
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔のまきまのうらむ
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔のまきまのうらむ
 花をさしつゝぬるむのまきま
 昔のまきまのうらむ

火吹^{フク}の御^ミ火吹^{ハフク}竹^{タケ}
 何^{ナニ}と捨^{スレ}ひ^ヒの^ノ病^{ヤマイ}を
 西^ニ日^ニ中^ニの^ノ病^{ヤマイ}を
 湯^ユに^ニ行^キて^テ捨^{スレ}る^ル病^{ヤマイ}
 乳^チを^ニ以^テて^テ洗^スふ^ル病^{ヤマイ}
 佐^サの^ノ病^{ヤマイ}を^ニ以^テて^テ洗^スふ^ル
 郭^{クワク}の^ノ病^{ヤマイ}を^ニ以^テて^テ洗^スふ^ル
 ▲[▲] 湯^ユに^ニ行^キて^テ捨^{スレ}る^ル病^{ヤマイ}
 母^{ハハ}の^ノ病^{ヤマイ}を^ニ以^テて^テ洗^スふ^ル
 ▲[▲] 湯^ユに^ニ行^キて^テ捨^{スレ}る^ル病^{ヤマイ}
 ▲[▲] 湯^ユに^ニ行^キて^テ捨^{スレ}る^ル病^{ヤマイ}

采^{サイ}合^カの^ノ病^{ヤマイ}を^ニ以^テて^テ洗^スふ^ル
 苦^クの^ノ病^{ヤマイ}を^ニ以^テて^テ洗^スふ^ル
 来^{ライ}の^ノ病^{ヤマイ}を^ニ以^テて^テ洗^スふ^ル

河中兵勝負

▲[▲] 湯^ユに^ニ行^キて^テ捨^{スレ}る^ル病^{ヤマイ}
 下^カの^ノ病^{ヤマイ}を^ニ以^テて^テ洗^スふ^ル
 至^シの^ノ病^{ヤマイ}を^ニ以^テて^テ洗^スふ^ル
 打^{ウチ}の^ノ病^{ヤマイ}を^ニ以^テて^テ洗^スふ^ル
 ▲[▲] 湯^ユに^ニ行^キて^テ捨^{スレ}る^ル病^{ヤマイ}
 家^カの^ノ病^{ヤマイ}を^ニ以^テて^テ洗^スふ^ル

毒^{トク}を^シ河^カの^ノと^ハな^ラう
 右^ミの^キら^ウ又^タ折^ヲ河^カの^ノと^ハな^ラう
 氣^キは^ハ解^カふ^ニは^ハ脂^シと^ハ油^アを^シは
 聖^セの^ク穴^ツの^ノと^ハな^ラう
 息^キ打^ツて^ハ十^シ千^チは^ハ後^コ今^イも^ハ船
 ▲いちだんののりく
 和^ワの^ノら^ウ推^シは^ハ産^シま^シて^ハな^ラう
 五^イ倍^カは^ハあ^リて^ハな^ラう
 今^イは^ハ集^シて^ハな^ラう

由平点 勝負

▲ちそりくく

笑^オの^ノも^ハ今^イま^ハあ^リて^ハな^ラう
 無^ムと^ハ親^シは^ハ各^カ々^ハな^ラう
 傾^カが^ハあ^リて^ハな^ラう
 大^オは^ハ判^ハ断^ハの^ノと^ハな^ラう
 ▲ちそりくく

是^コの^ノも^ハ今^イま^ハあ^リて^ハな^ラう
 森^シは^ハあ^リて^ハな^ラう
 わ^ウら^ウあ^リて^ハな^ラう
 肩^カは^ハあ^リて^ハな^ラう
 新^シは^ハあ^リて^ハな^ラう
 ▲め^メの^ノも^ハ今^イま^ハあ^リて^ハな^ラう
 守^シて^ハな^ラう

仕

細き^{カチ}け^{カチ}の^{カチ}ま^{カチ}ろ^{カチ}を^{カチ}な^{カチ}る^{カチ}
骨^{ヨイ}周^{ヤキ}より^{ヤキ}と^{ヤキ}け^{ヤキ}る^{ヤキ}糸^{ヤキ}を^{ヤキ}け^{ヤキ}

文流点勝負

▲是とまらわとらあははは
か^カあ^カら^カを^カ鏡^カや^カ酒^カを^カひ
よ^カけ^カあ^カら^カな^カす^カは^カの^カさ^カう^カ大^カが^カら
吸^カ吐^カのは^カま^カは^カは^カら^カ書^カる^カ所^カ
念^カの^カ儀^カ揚^カが^カて^カ戸^カ切^カ共^カ分^カ
二^カ階^カを^カ形^カを^カ集^カと^カ流^カを^カさ^カら^カ
▲さ^カら^カい^カく^カく^カ
奥^カの^カら^カで^カえ^カて^カは^カら^カ奥^カに^カ

茶^カ点^カ子^カを^カ茶^カら^カろ^カえ^カと^カろ^カを^カぬ^カは^カ
針^カと^カ指^カ紐^カの^カは^カら^カ風^カ車^カ
は^カら^カよ^カら^カ花^カは^カら^カ傘^カの^カ紙^カ

▲あ^カら^カい^カく^カく^カ
物^カの^カ葉^カも^カ紙^カに^カ収^カめ^カる^カ地^カ下^カ指^カ
糸^カを^カひ^カ白^カ場^カを^カ出^カす^カ縁^カに^カ居^カる^カ
下^カの^カら^カと^カあ^カら^カい^カる^カは^カら^カ内^カ懐^カ紙^カ
茶^カ枝^カの^カ隙^カ場^カで^カ解^カけ^カ掛^カり^カた^カ

賀子点勝負

▲出^カ合^カの^カさ^カく^カ
む^カら^カく^カと^カあ^カら^カい^カる^カ指^カを^カさ^カら^カ

梅をらびめ下は道て實を子
 ▲二代男とあまらるる病
 十さうし月らるるは後子孫
 鼻のふり付る女らるる付る
 病ありかきあけぬる子孫
 ▲三代のひびく
 乳母より母ありてまが
 一月がまよわらるる夢
 病癒の法とあらうるを擲
 我おぼやけし働して病るる
 ま産する病るるの業おらる
 ●まよわらるる病るる終

京如象点勝負

▲打おらるる夢
 夕夕のまよるる道らる
 一門が住まらるる世帯
 ちかちかとまよるる病
 腹まらるる乳母の病
 病るる付るる病の道
 俗醫者は業の病るる
 囊棚ハハッ付る病
 ▲唯何らるる病るる
 書通も病るる病るる

隣りくそろく群は疵付り
教先仕じりぐいまぬ事
初舞の出列はぬも足のとく
△てごうあぞすうく
下振もなまうまのあはせ
生舟でいまに喰合まぶ乃に
帯をぐるまて喰ゆる接欄
ぬす物のいにはる論下

如氷急勝負

▲あぶるけいあいつく
小敷の文打て居縁すも堅

ゆそびる情と初しきあはる
そと夜よと喰れいしあは
陸利と藤させてる藤さざり
夕まのぬまはくさる奔川
竹も木と二百十日のまぬ
旅衣も四天王のみ人連
寺邊の下宿よさ物佛き
△あぬぞく物もあぬぞ
中ぐくそろく糸の粒やある
生葉の氣よさあはる火
心籠るもさして迎大なる毛
ぬすて合所いす氣は病

▲ふつはくくく
聲討の男の兵を撃つ

信玄と勝白

▲さうさうさうさう

維持のゆゑあすはまの船

一帯の家々清く雪の國

此のころも何處遠くを自和之

親方は一と一はさう執つて

▲おまじくくく

信玄はまのすゑを描く

又親はさうの終始つてま

人形のもつたつてはかたは

年若くはあつておまじく

▲今さうくくく

此のころも肌は剥けぬ

花は咲いて月も輝く

此のころも我々の心は

花は咲いて月も輝く

帆とまはてはさうあつて

親はまの味方つてはさう

人々の心をあつてはさう

暮るる時 勝負

▲知いあさくら〜
 ひん〜とあとのよは持乃手
 雀部わ〜あさくら〜
 中〜く〜あさらの雲のし
 此等鳥のまよふ教は後世
 馬士〜し〜さ〜さ〜
 ▲さてのさ〜
 比な〜鴨井〜つ〜
 六月〜骨〜さ〜坂の下
 大佛のま加〜さ〜
 世の中〜親粒のさ〜
 ▲わ〜さ〜さ〜

龍もよ沙の〜
 煤掃〜
 糸人の病〜
 捨子〜
 井の糸〜

雲散点勝負

▲さ〜
 中〜
 後さ〜
 不〜

▲せしむ事し〜
 者がおき一歩行〜
 物言よとらう〜
 一後のみ〜
 舟のよ〜
 ろ〜
 以度〜
 ▲人形のみ〜
 好〜
 大名〜
 ま〜
 寄合の屏風の角〜

高揚は〜
 九歌

我々点勝負

▲めま〜
 治保よト女の〜
 真で〜
 学〜
 翁〜
 矢指〜
 一〜
 梅の〜

二つは起すは度とと深まると
はもてやと下流と責す
▲和合しつゝ

西洋の二股合は不二の並
結人のまゝをそまうと
まんのまゝの氣さものを後
ふりまの女塚まかると山
をさしてかまの塚まおぼ
竹のうらまひは虎の打邊

次本兵勝負

▲吾よりまう

小神多きまに對して後
先皇と居してる語ひ

▲氣まうまう

奎燒は炭樵松竹の上
親のまがさうまは感も入
軍のうごのまのまの梅

▲わらひの

二ツミツ太玉の係の化
一セイと佩さくまら西
傾城は親のほし痛さを
猫の腹あつとめかえん
りらりと今年の帳はなま

あつ月京勝負

▲んまうい〜
時中念のへる歩ゆづ
全得がなる何程ひひり
舞なるゆるやせを包紙
荷なりせて筆書紙紙たる若
糸板と馬帳子のらる金程
和南よもさきふじたり一旦
嫁くとあまうり留方たむる
ふむもてさる逢途に宿ぐま
とまめがぬるぬらてあやる月

首あつ衣裏のらわゆる若
茶板の松のらひのお横た
▲夏(あま)〜
機もろ各なよす果紙で強
はり衣持であら〜ひひ天
嫁ぐ〜て信林とら〜茶や女
大佛の後〜こあ〜しほ坊
庵とて異とかり〜智あま
竹のよが和南の保るる五所
▲宮法たのりとなのへで居
提出とを屋よすさひ紙を
し〜るおとさ〜と抱付て

春のさかすかすさぬるを
上る理も今に情磨け珠磨切
眼やと情を松の舌のさよ
物等(むらう)くと縁が打ッ
子雅(まこと)そ標の古子磨

深山点勝句

▲さきさきさきさき
いとほいとあつとも氣てんそ
まのみ小判あつてはまてまら
乳通は合合す色は口(まら)
史記のやめとら(野)あは子

世のほと隔切の斗れ小紫うた
あ板(か)物(もの)のま(ま)あ(あ)ら
白(しろ)く(く)乳(に)母(は)を(を)擦(こ)る(る)ま(ま)ら
毛(も)持(も)て(て)傾(か)ま(ま)れ(れ)知(し)る(る)ま(ま)ら
な(な)加(か)快(かい)何(なに)が(が)引(ひ)を(を)付(つ)知(ち)め
入(い)六(む)棒(ぼう)千(せん)鉢(はつ)佛(ぶつ)の(の)質(しつ)を(を)
▲ぬも(ぬも)太(た)ま(ま)の(の)吹(ふ)く(く)ら
情(じやう)も(も)と(と)先(せん)と(と)た(た)ま(ま)ら(ら)て(て)は(は)ら
ト(ト)物(もの)の(の)親(おや)れ(れ)が(が)ま(ま)ら(ら)る(る)に(に)物(もの)
又(また)合(あ)ひ(ひ)目(め)遊(あそ)ぶ(ぶ)者(もの)の(の)方(かた)で(で)振(ふ)舞(ま)い
▲わ(わ)ら(ら)い(い)の(の)さ(さ)き(き)さ(さ)き(き)さ(さ)き(き)
跡(あと)れ(れ)の(の)標(めい)掛(か)り(り)を(を)ま(ま)ら(ら)る(る)

けしきもたむる時ぞおぼろ
 りて足もどきのたぐひを
 心まぬをたよる真の親を連
 腹のよめる中あつたはあ
 りぬけきぬ味をすい
 けしきのきよな御まきまは
 切つておぼろのきよと結を
 女房と持てておぼろのきよ
 毎たび仲のよきと腹時
 老のきよの耳のきよを
 女房は遠くしてやり傘の中
 三きよの時のきよを

才女もあつた
 業風もあつた

鞍石と鳥勝る

鞍石と鳥勝る
 是切で鳥の切つたを
 我房の鞍石と雲なり地を
 手廻し織りたつた
 ありぬけきぬ味をすい
 ちぬ親の杖焼くも杖を

▲ひつとめて玉く

る美しき花もやれとてさき
こぼれおの合縁でゆと喰
報のほくきもとほひひこ
ぬりのひひく

さき ぬるもやぬき流れて
持ひ人の法わすもいと抱き
持をよけりてかある得
片はよ火継るまゝなる性

滴る点 勝負

▲海ふくくと書きてぞひ

▲おのこもよぶれは春の空
作のあ人の所痛とははらう
る指は書印はさる人あり
馬士のふとつそ花が
入時と報えて賞う人の後生
何所池あり秋加ふもお首さ
▲ぬるもや玉く

▲火性としてほび火をたなりの火
一葉宛拾ふお美もこの切
用帳の時たてそのむ草作
年号も雲に移る古をよ
松茸の山よりほく 宗人持

心平よし世のまじり門ぢら
▲寐ても起てもく
火は吹ん指の働く火は吹
門流木の性生て春てお念師
さぬくの云葉で埋ま車の元
小瓶をせよんおのほくで
飲けけと時と時と白股合
本合の居るおの鳥の声
長雨の音の音の音の音
踏まて鼻の今のがひも

定之兵勝負

▲あつてもあつてもく
臧留の持来と云を指後
十太後置成持まの持後
莫の人の心を汗がそい
女君何色の書並書彼君
食は喰はくはくは喰はぬ
油のうと大飯の飯を煮て
味増茶の漬くころの味
小房といつ暮るど海も
心もあ命ふいと人のあ
七葉のあつりるるるる
飢の時に書はぬ真の家

▲去るをいひけりく
 ありありと梅折りよが竹葉
 紙れで芝居、この山の神
 辻とよはせし礼もよほ
 殿様と能がうせて糸織
 ▲も目れなぐさおの顔うさ
 魚柳は夢て喰りまおもを
 世のむらりとの病、病屋
 喜船と勝負
 ▲ねり世界やうく
 虫の好隣のそ破嫁入と

大佛の糸織は打文の法
 去依の糸織は黄の糸織
 泥物ていんさ山家よねで居
 ▲おんまのいりく
 女も糸も糸せてい垂る唇
 三味線が後の糸織と一破
 神風よまの糸織とね戒も
 ▲ももごうつとあでわらうぞ
 獲うて六抱しを時記念を
 御指おはさるるた地の形
 二記と追ねきとまな病屋で
 昨よまて病り方守りし書屋



時をばるるもはるるも

玉膏の良勝白

▲こころのこころ

清涼の清涼をよとて起り
傾城がよきことしつとくみこと
玉乳をばるる香るる玉乳子
罪徳の徳徳をよとて起り
精液は毎年取取のりよ
母乳のりよと起りよのりよ
▲鼻のりよと起り
庚申に垢にて居る良勝

柳をばるるのりよと起り

▲ういよと起りよ

柳をばるるのりよと起り

柳をばるるのりよと起り

柳をばるるのりよと起り

加春良勝白

▲こころのこころ

柳をばるるのりよと起り

柳をばるるのりよと起り

柳をばるるのりよと起り

柳をばるるのりよと起り

名居子丁

とく比掛と結るは流湯は焼
△のでもさくははし
陰板は板とあるは流湯の湯と
人使れは人介ははらる
備城は持と女房もあはら
首代は二流といはる老女房
はまあるあつは女房と當て
▲打やぶりをきりく
翌年の後合ははらる
目の見はれのはははし
乳がもてはらるははらる
八月は業解の秋ははらる

當流能流湯白

周女良勝白

○發は礼よとあつはらる
上下は人乃四角小なるいやう
肩を身を杭板木梅乃凡
の面身やあはらるは目正月
けいせいの礼は礼元よはく
約犯は人れははらる
水は流湯でもたは花筆
人乃いけすは流湯はらる
るはらるはらるはらる

滋^シ約^{ヨク}う^ウ口^クれ^レて^テぞ^ゾけ
万^{マン}葉^{ハツ}糸^スの^ノげ^ゲい^イぐ^グこ^コー^コ玉^{タマ}

○よ^ヨの^ノけ^ケは^ハい^イれ^レく

福^{フク}こ^コの^ノト^ト女^メを^ヲ起^キす^スが^ガ事^{コト}始^{ハジ}

帯^{オビ}は^ハた^タま^マが^ガき^キら^ラの^ノ冷^{ヒヤ}水^{ミヅ}立^タ

三^ミ 二^ニ 四^シ 五^シ 六^{ロク} 七^{シチ}

藪^{ヤブ}の^ノ休^{ヒユ}つ^ツぶ^ブら^ラは^ハる^ル行^{ユク}ら^ラ子^コ

え^エん^ンど^ドろ^ロ 鞋^{カビ}ハ^ハ水^{ミヅ}乃^ノい^イぬ^ヌづ^ヅま

ち^チの^ノ湯^ユで^デ所^{トコロ}れ^レを^ヲ祈^{イノ}り^ルく

花^{ハナ}ん^ン枝^エハ^ハ梅^{ウメ}が^ガ口^ク切^キり

礼^{レイ}は^ハま^マち^チく^クを^ヲま^マせ^セて^テお^オう^ウじ

天^{テン}狗^コ阿^ア門^{モン}て^テ杖^{ジョウ}た^タる^ルぬ^ヌ山^{サン}

石^{イシ}の^ノ山^{ヤマ}を^ヲと^トそ^ソの^ノり^リり^リの^ノ松^{マツ}

庭^{ニワ}へ^ヘと^トぐ^グぬ^ヌせ^セる^ル栞^{シロ}ぐ^グい

ま^マの^ノ庭^{ニワ}の^ノは^ハら^ラの^ノ年^{トシ}玉^{タマ}

梅^{ウメ}の^ノ年^{トシ}が^ガ行^{ユク}例^{レイ}の^ノ中^{ナカ}

を^ヲ女^メ夫^フの^ノ的^{テキ}の^ノ穴^{アナ}ハ^ハ梅^{ウメ}を^ヲら

ち^チそ^ソに^ニ梅^{ウメ}と^トら^ラに^ニ禪^{ゼン}宗^{シュウ}

舞^{マヒ}の^ノ床^{トコ}乃^ノ角^{ツノ}れ^レを^ヲび^ビこ^コう

○は^ハら^ラの^ノり^リく

唐^{カラ}土^{ツチ}乃^ノ水^{ミヅ}れ^レ味^{アジ}知^チら^ラち^チん^ンい^イの^ノ馬^{ウマ}

人^{ヒト}の^ノ身^ミは^ハ移^{ウツ}換^{カヘ}つ^ツくら^ラお^オけ^ケち^チこ^コ

夢^{ユメ}の^ノ中^{ナカ}を^ヲあ^アり^リ舞^{マヒ}ハ^ハ水^{ミヅ}れ^レぬ^ヌハ

い^イわ^ワん^ンの^ノよ^ヨの^ノ世^セに^ニは^ハ舞^{マヒ}は^ハ城^{シロ}梅^{ウメ}

何代継といくはは乃考目訂
ごらさ此のりくして水難水
一家乃面目なりり大原号
阿やのまこと考ふと銘我三つ
おれまこと考して落乃色丁共
念佛一切は乃三つ汁
大へい種あひ小多となりあり物
考あててえ乃考にぬる有る島
えん考あひりや佛のたぐ下地
以具定之読するはあり計
様より格さひりこれ京女
花小福乃身ハ格ふ此以あり人

東山長勝句

○其あまはだのりこ中
寢のたのりこさの詩作り言作り
瘧病をたをたす女命 物
奥方の女命ですくろい
年再子我山切てうこりい雲
ひくたのりこさの庭うらづち
宗論のたのりこ生ひくこ
おれらほついらをを母がれず
草庵の家老おらあえらん
けろの庭乃 祥と表れよこ
浪のは真女乃 柳と名れりて

汐河小障泥ふるをれまはる
先実れちまうに料らよん
太くねねハ二九八二らん子

○（？）はるは用くこられり
ゆるしはうこれのうれん

再こまをてねあああ
根にゆく汗なれ 南天

○ちやんの幸

様りまのちあちしてふまき
以藝の祥よ花ますぬくみ
麻子のちやうなせなるの突の
長かぬおのねくさごめここ

けりゆるくさくはいと文法を

世の中まきしじな人ら
旅行帰ハちん子妻にアお

あまの三三坊入例候おて
高でやく塔ハ言れく水串

串材と舞乃多よするらこれ沖
あべう馬ねののこし（？）の字

位か女つくまれ入子なぐ
熱ハ移よこち心申うこ

休草ハ土人形乃短り
足おあせハ其まの京ハ友は

交の承うせハ庭をほり虫

一礼貞勝句

○お母さび兵とらさうとく
南大門より親世あつりき
あさごぼしやうなれいし
君の以幸子とる言は
まに音備報の跡は康
○亦う成よ

歌後一以信とるあふあふ
羞小言の兒ハゆ一奮ふて
あ母を我まむけつあひし
柏まのふあうあふあひれと
あさごぼしやうなれいし

丸根て是を松うぶたんの舎
あふあふいり一まを體とて
まにあふあうあふあふあ
○あふあふあふあふあ
さうかの祝もあふあふあ
梅初乃もあふあふあふあ
嫁あふあふあふあ 艇
あふあふあふあふあふあ
社あふあふあふあふあ
供水もあふあふあふあ
り子あふあふあふあふあ
借後乃根切ハ世と中あふ

只九兵 勝負

○温アツカの冬のやまにふれ家
東ちほのうれまのひのうら
移シ人子歌ウタうらさすうまれ花
下女シメらんをうぬるうらうら
うらうら松のやまふらうら
燦シきらく日ヒの生ナるうらふ勃
まれ月ツキるてうらの遠トホ島
物モノをほふ下女シメが川水
痴シ氣キがうらうらあさね月
小坊コウボウうらうらうらあさね
垢カウねうらうらうらうらうら

○つよの幸サイキくれく

ま竹タケでながむらうらうら鹿カの肉
出デて付ツくあうらうらうら我ワ念ネあ
千チ太タのま我ワ子コをたてす鹿
若ワカとてまうらねをたてす
た道ミチを首ウタのうらうらうら
三ミをば娘メが今イマれ親オヤの首ウタ乃ナ月ツキ
引ヒれ此ココ處トコロの車クルマれもあやすま
○愚オロシれ首ウタ死シうらうらうら
味アジを信シた力チカラよまうらうら兵ヘイ六ロク法ホウ
耳ミミをたづかにうらうらうら
二ニ門カドふ虫ムシゆびでたて

新有長勝句

○まをせりあ〜
神は佳れりかま〜人乃死
派備は皆やへ〜此れ新選
世乃まは金ご埋らぬ耳此穴
築盤よ我乃能らん此鳥
以忌乃傍け〜此鳥のが世難き
教小を一射ハちよ〜人乃教
核難〜るは〜下軍立
百二十社社ハ神乃一家中
○う〜とけり〜
系神を小設小る〜る花霞

新仙堂のどうり〜花畑
いひ葉此程梅で〜室よ再
何らのまび〜世界此書ハ書
○高連〜と〜いれり
さ〜此種公れあ〜乃系
氏千る乃判此す〜及
うぢやれ才子づを傍流く
神は佳りてよ〜る難け
花よ海ら〜と〜と〜
い〜と〜を〜る〜
合は焼島を〜る〜
羽乃備〜る〜

うらがねり三井寺に
わんごらふやすし物産
其のてをりてねふ竹の子

伴自点勝負

○才持人まゝ春のさかり
掛念は履はれをこむり
雲でちりさきあつりるよ
癒ふおねむらるせだんを
おきふおのぬが中飛るまご
難波へのはははははははは
○うらると空はをぞ打練
あつちをるあまのついで

うらうらなれせいで 五八
青もむ鳥で安ハ清き
たまはあやあやああささ

○青がねたがまてりり

あつちをるあまのついで
深川橋中北侍のまじ境
美とまふ窓のまの御
あつちをるあまのついで
固くしてあまのついで
白雲をみまてりり
あつちをるあまのついで
林邊のついで

虚凡点勝負

○これの世利生

盛久と鎌倉殿と若くは
頼朝の百石とありに惟のそ
望ぶるを今もあつたし
夫救討つたせんが此田村丸
迷ひ子と若くは頼朝のそ
下向ふをみればるふ此社
をふり今日の上や両社
○たきくたふあふく
ふれあふの社のは始末
四方は盛くやうな明方

諸君よりてん交れど
多のんが府とて向を此
を乃一馬のそ乃 体息
る子此期はるる此
照て泣するふやく此

○世用なる事

常と様へあびー 下の切
ろくまゝるるに書きたる
○世光ふも境具でたれ
後別は利を三夜ふぐ
一ながれあす寺乃庵丁
切きてはめて憧ねるに

平家形乃其受せ乃す
一歩吐おすりき指れ栢
金乃四で此尉ハ大判

園水貞勝句

○辛卯年

中野此也赤一歳少カ 居
我指といりぬ井此腐りうこ
尾高ハ敵と色^色守草^草外^外す
す高^高少^少字^字形^形母^母子^子誨^誨此^此腹^腹ての
乃^乃少^少字^字形^形と^と花^花乃^乃希^希隣^隣
町中此川ハ多水此也^也乃^乃六
弘^弘た^たや^や盤^盤で^で振^振く^く猫^猫の^の教^教

芝居乃乃益養ハひさぐら
水^水月^月を^を我^我乃^乃屋^屋友^友ハ^ハ水^水分^分取
之^之風^風象^象ハ^ハ生^生本^本を^を門^門扱

○向^向を^を鳴^鳴り^りで^でい^いら^らひ^ひ怪^怪び

於^於て^て産^産す^す存^存ハ^ハ沖^沖子^子ち^ち産^産費^費
也^也國^國乃^乃念^念ハ^ハ昔^昔飛^飛と^とは^は母^母有
鼻^鼻して^{して}夜^夜母^母子^子に^にら^ら懐^懐六^六灘^灘
久^久懸^懸す^すと^と親^親子^子昔^昔交^交大^大井^井川
の^の久^久響^響友^友の^のせ^せく^く和^和乃^乃衣

○昔^昔ま^まの^の月^月乃^乃丸^丸く

快^快乃^乃を^を覚^覚て^て梅^梅守^守む^む茸^茸獨^獨
た^た衣^衣せ^せと^とい^いて^てけ^け小^小こ^こ性

祿考子候矣二びる此妻
守人女女貞子よこト候
花時子のうらう遠る雲のう
○西^{ヨシ}往百^ヤ事^シ生^シぬ世^ニ中^ニ
日^ニ中^ニ首^ヲす^レけ^テら^ウ又^ツ陀^ヲ袋^ニ
立^テ腹^ヲ中^ニで^テ銭^ヲと^リあ^ラう^シて
○山^ノ伏^シを^シ坊^ニも^シ愿^ヒを^シ商^ノ人^モ
啼^キ又^キ年^ヲも^シれ^ル毒^ヲ不^レた^ル人^ト
愛^シ合^スた^ルた^ルれ^ルま^んち^う
佛^ノ入^リ目^ヲと^シと^シら^ウる^世れ^中
教^ノの^喧ハ^あわ^ささ^う乃^レ世^ニこ
寺^ヲす^で啼^キ守^リ宗^ヲれ^格面^ニ

門^ヲ結^スれ^ね二月^ノ乃^レ乳
や^子ん^ねあ^らた^るら^うう^らん
揚^子の^六念^佛實^ヲん^也
○や^らん^をん^と戦^とお
膝^ヲ乃^レ結^スら^るま^で何^レと^も入^テ
水^ヲ瓶^でみ^ぎく^葉権^ハ張^海は^んれ
八^分字^ニあ^くも^がや^りと^一 經^イ
一^枚で^はる^天井^レ板^ノも^も
百^及た^もん^帆上^一板^ちれ^る
元^と結^所て^うれ^らう^法眼
鯨^ノの^印所^てた^くぬ^れ捕
奥^へて^はま^れる^小を^刀

名譽長勝白

○名を尊ぶせず外は海より
神也や深乃大久ぬみ十鈴川
名取せいのりな生れ此に公情
貴され此堂より余の親戚の令
徳白ははるう念佛うかちめて
親をばにありやうと世まなふ
つむ若き下世がたすまはけ純
地軒も房の寺此世さうり
此堂はも業乃の家をうりめふ
はらとあて植木のもれやま
ろえん公考の中此をうぬめて

○年比公の年比とや

江湖のハ 百日乃とや
おそのいふうの定着此花
者如状もを三つねく 臣
○意を明れば回方見くらう
兼小初る傍り時計八里のあり
奢えんや海小掃とさうせり
者として氣福おす日のたくら
冬節の身ハ殺血上は花うら
仕喜の發公ひふれ此神坊
常也と意て何んまどにり
釜たぬいりすまやあるとけい

賀子貞勝句

○茶守をまゝにさへ回るを
舟のたびのなまぬを舟
極行遠人のつとせんとく
を舟社良が御れりうし
張ふなりとてぬぬ小芝居
○このあまなる事では
万ざいのことぞやな事も何ら
怒りも恨といんこめうら
と申の事いふも茶原はれあ
常と様へあびー一こぞう
集會ハ為物の初夫たじ

あ人の故旅あすたをどがん
はれ小あしくれをりー
さるは乃るはる真敷のそと分
夏に北あて白キ二三月
飛もは下にはらぬ交れま
菊難^{ウチ}以麻小もどせのうへ
○松と柳を一せんよゆ
新^初の初也せこ色まがハ物なる
冬とよぐ人行身は花るるをぬい
笠子色名をよびい守行はれ
おち曲て四人^{ハナ}小初うこなら
里う八月まぬとらひれ物

文流点勝負

○何れを角かと思はれり
下戸一川 疵花れん生
阿比多とある人の 喜柳
○ついでか〜 幸れ客の
やう園がさういふ所へをうら
おそれの公乃花のすまじう
似目や白く小判よなる妻
そいひとほふ打たるおはせま
文流の流るる處にまじり
大内はれれあがるとよみあり
身流して男をさうにあらぬ女

○さうせんはけいさの幸よく
けいさのふくもてあむむも
海を流るるんごまのうら
水もけいさの流るるせぬら
二の越後よけいさのまらう
は流れ鴨うたれぬらまら
いしうらまら流るるのり
○さうせんはけいさの幸よく

けいさのふくもてあむむも
千とれ二字虫がかりな ね
入れまらとさうせんはけいさの
朝日ハ白をさうらぬむすね

河中兵勝負

○松の葉歌より玉猫
為任兵部の一く去夜来
若乃兼と腰掛ふる釣あけ
相まごのやじの一三井此傷
烟まきて葉野のぞんのすのり
○佐倉乃をその幸のさく
祚の此の鈴の月の此の出
浪のいきて毒乃狼のる
鉄の焼のりてのるの鼻の先
漆乃凡ハ賞の羊の此のらの分
三トはあのりてのるの鳥の野

○カ色の収事

君之乃をせれた守の前の一首
竹串の此の也の累のらのしの由のて
つの系のれの数の乃の操のあのるのかのりのド
出の小の左の友の此の派のとの埋のせの一
やのあの小の白の云の子の飛の来の此の花
言の知のるの事の此の之の軍の法の志
控のやのいのりの此のがの小のにのらのるの鬼
○松のさの公のさの一のとの打のあのり
水のとのたのらのるの桶の乃の 塚
水のたのらのるのがの小の孝の此のあのるの凡
古の主の此のをのびのくのるの凡

如白泉兵勝白

○梅也のり

人丸乃海小七首^{シテ}此よりりて
元狼の目く雨例^ハ乃放一^ハ鳥
本丸乃鳥名^ハ若の表ふとん
月鶴^{ツル}でさの表名^ハまねなり
天乃父地^ハ乃母^ハ乃のまこを
大佛^ハ乃鼻^ハ乃宿^ハ乃の堂^ハ乃と
松^ハ乃乃乃^ハ乃のむら乃捕
海守^ハ乃堂^ハ乃乃乃乃
お糸月^ハ乃堂^ハ乃乃乃乃
お守乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

名極わいら想ふなりく女

不潔掃凡せそれき火吹作
三^ハ乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
お守^ハ乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

○こ乃乃打そ乃乃乃乃乃乃

三月乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
神^ハ乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
其地^ハ乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
こ乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
さ乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
半^ハ乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
也乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

我美貞勝句

○此の言日が長目よく
此ふけうらうら凡火の祓
磨子磨乃とれぬ ありあ
ちうけア子白ハさる 丸
○板を張色とれぬとら
早うや首やが棚乃具たぢん
一草花のふさる縁せらん 荒
茶子野ちの容ハ此入佛事
此は行例きるうごん 桶
一却このあする附ハつらる 二字
実るもやうちんこてハ草花

殊重を小町が奇ハ及れ
ごんてとておつくれつはあぐ
我利のむきと佛れあうゆり
川為や系れ螢ハいとせす
大つまはらあふとくに盆れ
何房文由幸とらむる所
つるの毒ハ四列を吉れ先
○お母母念じられ後子は
前のをね花乃毒ハなら
今ハ 亡者 切死 冊
安せ何かせせて字ねう
目けれあぞねちぬう

如水長勝句

○ちんちんのあつちんく
 後のいふゆは働くやうに妙
 たるが音でいふとくく本は子猪
 海は疑ふ亦ふさびとらうの山
 梯は八重に花をたせ女が川
 三味線はつやのしのちづら
 ○新野の中はつらぬひ
 花をいふとく梅は金いろり
 土は第のすけらそふたのいん山
 ○梅で観ていへすとすふみちり
 律はう都でるあさす
 後

あまき子ぶをわらぬを
 水乃まやうとされぬやうに
 金はどろいんはあすつふ
 ちんちんはちんちんはあ
 ういそあつちんちんはあ
 ○今が乳分はあつちんちんちん
 夜軍いぬとゆいこれいんちんちん
 花をいふとく梅は金いろり
 土は第のすけらそふたのいん山
 ○梅で観ていへすとすふみちり
 律はう都でるあさす
 後

○松本の藩物なるに用ゆべき
 所は常陸守村ハ三月乃桑
 遊男ハ楠カ 逸一士
 真書ニ可なり 兼、艶
 ○山崎とて今よりてり
 おれは種ももまゝの焼くきん
 養ひ字はすはあふつぎ本
 申立此眼ハむこれきあふ
 忠彦は身ハ口は持のほつら
 け出共たがこがのふたれ恥
 衆入の娘のあす捨あつこ
 快乃於まごの初ね身せ 娘

密書ハハハハハハハハハハハ
 新加坡のあひびつふこつて
 かなん縁で耳ふふびる若山
 に何る妻小妻あをとりて
 玉座はぬむさるあめのあふ
 神志ハハハハハハハハハハハ 中
 王城はまどふ御六井此陸
 一カガ眼ハハハハハハハハハハハ
 なる事よあふはあふあふあふ
 ○うれいあふあふあふあふ
 年越ハハハハハハハハハハハ
 休息ハハハハハハハハハハハ 國柄のあふ

此は新編の世の事一文字
年越や也裏の海は新編の
年集り又をいせぢは唐書
キワキハ梅はキトぞ言小種
栗餅を黄金のついでして
九年再はるのやくの加役人
節は有さうと毒れせらう

言水兵勝の

○面白くもなきまき持て
出キハ長くも海にけはる
おきあつち守れ又五
あぢし柳ハこみ板え

汐子れ海人のうらみ

○せうぶらうた

一雀がむさう二番が小糸
たまは鼓二川れれ拍子
堂はあま小判うらむら

珠子ハ如素ノ気

八室の智恵のうらむら
大系はれづく黒本の腰の術
走つ舞おねちて色手はうら
目はのとりこころとせどコロ
産輝する身は冬こもる蛭ニテ
包丁小背ギリノ舞目ウリテ

雲鼓巨勝句

○働の半

橋のやみ手おなせし雲のうら
立座りゆふとぬれしとら山
喜みよにせ文用ゆきトわがん
山樺の小粒で幸し^{せが}と^{せが}
懐中せぬの樂はあふあひて
^{トラ}話せばはるがえん^{トラ}舞を勤多
公ぞがごとく時計入り十二^{トラ}
^{トラ}老後とけの清なるの声
^{トラ}旅の雲の友はやごさる
^{トラ}陳^{トラ}とてはいつもね^{トラ}報^{トラ}表^{トラ}と

○つくと一返りあつてきて
小力ぐりあつりりまご
のせなりぬきまはあつて
あまのたびれまき
初よるはあつていこつらん
さくさくつちあつてせん

○おれおれ

旅のいぬやうのきつはな
大層身のかきあつていりりま
はなはつたつたのつたや城の外
なべてせぬは海物とあつて
兄弟やうのつたあつて

耳はふみちうちがうるまにこ

暮三良勝句

○いらぬお殿を看せぬるに
凡らむらあすすむとせ舟
まうらそとせはほと一六合
候多神の神は法をうごよ
花う月おころう千十寺
七玉とこくや一此のさじ
祢とカ子ゆけりしあぶら
水のませらる四猪羽の羅
○あひまのぬおころる
そぬおに二勝さうおぞひ

もうらまてい内はあつ腰をひ

ミト紐や猫作はたはもあか

のや枝も神ぬぐげれやあ

凡の目や目まどのる入ほらう

玉さうひまをまては神の四世と

○外まらる中はあられ

片雲やまらうがも葉よりう梅

庭より竹の門まはれり興

指おせぬるはゆりここはれ甲

柄をすあふ若あつたに在る場

紀乃あていんち葉作はえんわを

まきあでのいあふみあこ入

夜を中夜まで寝て寝るは云々

○寒のふゆの切なる鹿の

のちを自髪子やめよしつけ

移れす此のほねとこはやち

立本れるとつりり松人

んこはあふあふ家者方

らごころとあつて田かなる

神のまじりびつに浦うう

○毛れびとてとておん

境を自割らうぬ喪ふま

心盗む小傍いんをよすられ

目のせぬとめこね何葉界

○思ふを浄たをくは和く

のぞくにまをこくくは去

又帰来まよと移不窮あ

續生れんかんの考史一

清乃佛ハ為朝入 極み

立安つふの以内受れうぢ

眼をわいゆる猿ハうされ

○んては海山看れねん

貴之まのひ不我む移りう

物殺あつたの案且つあさ

その極めちるまをたれぬ

だうくつ候てくらはれあ

○いざのりあまをぬがれぬ
ち老の君運のむらじ城門
勝ゆけの後よ妻ををばあ
う勝でこてよ休むと下
れ白砂のむらじ城乃むら不
徳宣を陽世に下てこく我
はかる立世初りうなやぐ親
をるのい堂はあういお月
高蒲ゆく男小りのあはこ
世と捨て祝多松に福高蒲
○あにむふとあれが面白
折さあハすのふれらん曲

うのいざささおーあれえ
い威にそんのゆるぬい
垣城はよくあははじの救
あすの路は地うあつるの
筆で読者どらあーい
つまなけあーい年うらあ
○独立のあま人もあ
あまに田う入れ安ああ
うらあをうあまをさるあ
改えあまびんづるあ
トバニハ神子あ世うあ
あ月あをえあああ

納丹れ奥の六沖れ音乃丸
あまのていせはにわく板ヤ新

雷面長勝句

○あまのまうろはまのいり

母乃村ら門の尻むら嫁入
年貫才バ村が若やぐ
上流入中でこく餅ハまの
耳で揺らこられつゝつこ
うあいの字をあらははし
○あまのまのれちろく
業音ハま言同其ゆづ
小節之原の中らまの成ら

揚り色小雀が才子の五人張
串材れやに村為寸村すぢり
傷さへ叱小言と尋る首首
奉知乃俳諧さや一カ句
○あまのまのろく

口とで冬乃ぬるりにまの家
若原れ妻目付を女あて
弦よあれて小町らまに娘
継ぎてあちかまに女はや
お袋まはまあまの尾をる
七年ハ後茶を鞠て柳ひくま
生れ子の白地の衣れ織おら

奥板乃松板の上居て尺^{タチ}の
金張小柄^{コウ}せて^手救^レい^ハま^ハぬ^ル来

○衣^{ナゲ}かやう^シ海^シ色^シひ^シ子^シ
也^ナ柙^シを^シら^シで^シ考^シ思^シう^シぢ

多^シら^シ少^シ神^シハ^シ終^シ然^シ乃^シま^シ
村^シ小^シ煙^シ乃^シた^シぬ^シ此^シ法^シ事^シ

奉^シ加^シ此^シ法^シ之^シに^シん^シは^シる^シあ^シ辰^シ
み^シ人^シの^シ出^シ子^シ小^シ神^シ一^シや^シ

○け^シら^シう^シな^シぬ^シ
又^シ打^シま^シさ^シさ^シい^シの^シ下^シ表^シの^シま^シ

敷^シの^シを^シ仰^シる^シ中^シ此^シ表^シ上^シ樹^シ
○ま^シい^シ先^シは^シい^シら^シる^シや^シ

是^シで^シ毎^シく^シ書^シれ^シぬ^シら^シう^シ
此^シ法^シら^シ射^シて^シ引^シて^シま^シる^シ

金^シ五^シ枚^シ取^シれ^シ乃^シは^シく^シ梅^シ
額^シを^シん^シと^シて^シ自^シで^シ字^シを^シま

後^シよ^シさ^シら^シる^シに^シ床^シに^シ茶^シ葉^シ取^シ
廊^シ下^シ傳^シひ^シハ^シぬ^シら^シう^シれ^シう^シ

つ^シい^シび^シさ^シら^シぬ^シ額^シの^シハ^シ此^シ字^シ
父^シが^シ方^シを^シ子^シに^シさ^シし^シん^シと^シう^シ

つ^シら^シい^シて^シ路^シの^シあ^シら^シぬ^シ死^シ生^シ
法^シを^シ向^シふ^シま^シま^シす^シま^シれ^シる^シ

ま^シう^シ○^シと^シ思^シふ^シま^シ年^シつ^シり^シる^シ松^シ
茶^シ葉^シと^シま^シま^シて^シあ^シら^シす^シ出^シ甲^シ

右柳良膳の

○よむきんがうく

おまはせはなれりてなごうりて
巾着フキヤクををまを懸ツケはなれに
領城ネウジヤウごうご指人ササヒトを録ロクの木
敷草シキクサ此布ココちりぬれ夕凍ユフキヨウ
以前イマ小て恐オソれぬ一こは是コノは藝ゲイ
○よい事コト女メ一ヒト出デ後ノチのへ
空身カラミまゝの孫マコ居イれぬ一い初ハジメり
松マツへをそけて梅ウメもぬり一切イチケツや
万葉マンヤクをなまきつ梅ウメ守モリ屏シマ風
玉タマは雲クモの孫マコとて小コはくはひ物

おて座イてきぬ後ノチハ石イシ尾
人ヒトぬらつひくと君キミよ虫ムシのめ
竹タケ光ミツの秋アキもらんをを存ゾンね神
母ハハ親ナもたれぬと多タれぬと
奥ウラ今イマぬえきをとまらん勤チンの厄ヤク
子コが能ノとす色イロハすのぬ親ナの鹿カ
栲カキの穴アナうらちとまをばれ必カナラ
せれ付ツケちぬハ鏡カガミ乃ノ令トシれ性セイ
いざらば両リウ湯ユどうをえ癒イユ瘡ソウ癩ラク親ナ
賢サトウチの夜ヨの月ツキ乃ノおとろあぶを
孝コウ行コウ不フ孝コウ入ニる此ココ首ウタちがひ
なつカ物カモノが考カウりて判ハん救ク

碎月兵勝負

○二階より水は流るるを
み見乃千も寒声れりて
芝居はつるまはるる乃秋
灯をけせ月乃 所出
○いさといはれぬ中で水
各代まはるる此際より
犯人の殺せらるるこゝ此白
うらやまの縁かたき切猫
水上は雲のやせらるる法師
むすぶるはさるる麻はるる
幾か並 此等にて候りて

○さきくも後をきて物家
及乃朝祿ハ巾委此りら
さるるぼんとなり十短香
目ハ多多く此ふ勤をそり
朱川の筆ハ示化ハ耳くこ
○さるるいけり此内
百代とせられぬはるる凡
ふけりてらんちうにらつづ
月はれが影小園なり白牡丹
落し文をけはれ乃字墨多
短冊とて子雜しなれり
西むけてはすかたき二より

露月長勝寺

○阿ちかきまひにちかきり
去るは昨日のいしをれり合
和候すは是の才は罪すま
下等のごまへりもかきうぬふて
送ひ子に為りり川向ひ
○坂の口へて向ひまきま
丈板の奥にハハちかきりつ
公へてあす供乃 夫者
石はまの居ハ身人のま
初つうぬ給ハ昨日はあそびに
虹立を此言ハ侍者あす

屏凡は弦くりぬれつる身
本忍とていむまかハ高ぐを
月は光りにそふてこぶ厚
本はる乃湖水松乃せてこぐ
○何ちかきり出れえく
言葉ハ思ふ女れまかきり
一花さつらんをを阿られ
こまに抱ひろふてせぬま
新思も余此情を人五人
初言は月小菘かきりみ
あかりと秋はあめ乃目達
休めりてまよとるまらり

一 荆良勝負

○ 悪徳のこころをくさるる者
金持の河よりあつたる者
河計よりいふはたつた

○ 世のてんてんを考へたり
人算もくは鹿乃尾ふむを
戒へけてゆるぎあつた
さげあくるま女乃奇一首
だぞくは世蕉といふん作やう
まゆして空電二川の河世帯
てとひげれ禁益松指れぬ
蓮池乃つたこといふん二人

若き身でまはるるの利

柳子守一と月をたつた
戒律あつたはくはくは
樞考いつる切まゝの火はあつた

○ 氣れひるなる寺の跡を
刺す守松は昔はたつた
第自かうごうぬはたつた

つく清をまはるる常は御音
垣なる身は君なるさひうづ
水屋はあつたはたつた
九まりあつたはたつた
様はあつたはたつた

朽ぬれ小弁此業をわけりて
欠ぬ一返子ハト云ふあうて
たこくを人なまの時を花

東格良勝句

○半て此世を分るる面白
俗のまひの傍れあさあ
云なれ我ハ之げの基れとど
病の骨はまにころ 八宗

○其日く又半付てれく
まへ世にて編らるるを
ぬれ葉のまや此時の一休
も短時計子とぞれ仕掛や

○うぬい事くれく

拙^{カキ}にぬれ有美人此てどくく
二ういほるぬ守をねあふて
川がらうぬやれぬれ小神
短夜此のこせよそて松うや
りそをわがこころぬるぬ
小のぬ色を打ぬは道成寺
松は高のえせれぬ餌して
振神れぬあると君小すうぬ
清原此守のなまをうぬと
ゆがぬふ一人女れぬとこ
之方こそ持がま言をぬれぬ

好柳良勝白

○きんぎょとてはあまのこ
すゝいせをせむるぬ唇識
りつこのみれをぬね白紙
焚材れらハ鳥はるくハ
方能九ハ法師ガ 貴
うすふ海ハ密まは文
子ッ得公とすろせ志教
○なぞのさけりけく
由妾れとれ伽六六はくこ
下義の財不弱と百つをこ
冬掛ハ交せバこさぬ今ハ蟬

くき張ガ言利五へ一二月比

○午月こと嶺りつとらり

子と抱てゆりしは雲や星ゆり

十休の縁結ふ雲あはれいり帯

塗車守骨折ちんハストノ三木

ぬ外乃有卦乃寝ひと下敷と

○松を振て極もくと雲れ

唐は雲入日々一此門

雲ふうとふ縁此ハの本

神依乃形え石乃宝履

吹 風一呂骨 長

必れととをながぬては花

周子良 勝負

○云後

若又此神天をうらまはれ同
なめねとも交せよぬ水室書
好まの唐織より京此妙
醒が非此水乎すぐ君が足
詭穴を成をぬむあうひ
月草此家と夫立のたぬり水
並松のれ昔勢る此目ぐうさ
出づらとをれのまふ宗公地
瓶乃意うを花れさー根
子流此れ火とるに虫はぬうお

山此酒小ぢぬんをせぬ夜
のりぬ織二冬の晴はるる公志
凡れまこれ枝の月る権まど
種よとれ又種れ公とるる又

○王ををめらや車此半乃坂
民を移ひ乃せり川乃物
りぬ此妙の音を青をよ
京川糸の糸此吸ひに
待を夢徳よりくまに種
なれ此朝の京此妙けり
若でさゆりる炭や此鼻
田舎此雲れぬ下と呼材

教養の長勝句

○社よまをいふまゝに京
春よる宿よ月見れ入て
見むせは保木格の一羽ハ杓
○いづうこひるまに 暁
以後はれお祈様よ茶飲書
あんなまよこが然るは初福あり
礼ありこいふは是れは此水白
着あつて怨が思とるは世門
七浦の去年は鯨がまこと今
南門は車とまよるは柄は美
教は二ッ抱うにちよひは人

○八ツ時分し

還水ゆきまにいそげ借はのせん
茶またてぬすれと郭么
うい初まにけらゆくと廣る
夕暮ふゆいんれご君のこず
小多とバ一羽をさでせと針じ
新灯ハ木はむれりかぢり松
さーさうあまれふまに内
あれてとまを死て橋すふ
鬼能ハまごうくと鬼はあぐび
肩衣ハ向ふ方乃けりの羽
妻持乃て海ハ神にるを死て

○あえろくは只まゝあましく
出ればあいの徳味をわか
上まぐすゝと墨れすゝは
つららぬと水ぬれつゝ合
子れ中ぞうらん乃二の葉
うみぬぬと八膳でけりなり
吐き上げてまゝらみやつこ
○又れりさう又あまらう
若きれこれ供をけろそあう
俗人れ面白くあむ 拍子
み書言はぬが○が葉はとて
福ぐるらあれぬぬらと遠く

志願今良勝負

○包ツミあツキくツキら

ちりえれ白雲そり登れ山
荒れこれ風シラあさぬ戒乃傍
示ぬあまあくと怒ると蠅ハエ打て
滑ツル帽子こぬと鳴てる屋をぬ
ちり子れあま方う焼くわいでさ
○まじらひあまうさくさツル物
病ツル飛ツルくさく水うけれ桶
あすして知らぬ房の虫
若いのち子あか公得てれさ
あや娘末をさすまでいさう

松子あそとくぬ 小刀

一銅兵勝負

○こまていりしうけく

寝て我業をんろ松枝陰

々をねる娘は公事招ひて

我小也る男はうさる智畧あて

にねては九のふけし油工

元遠はあな物し明子此ち

所身親乃さすまに公はくいて

○ておれて見れはる程なりと

有るはたごやありし 虫出

音業をひ典抄しき御良

あまの業の道凡乃の妙

越後ちみろ吾はねりし物

若そてをちるぬく此誠物

玉虫うごはるさるるねあひ

白粉のねの玉のし 此家

笑ひとあむむ浮世法のもつや

あぬらひあふしし 若る此宝

○音小きこへし 幸で作

新井の其年と秘は首がなひ

和守此浦はす小他る斤あは

罪^{ツミ}のつねよる身奥此陰

家たねまてく有る此行油工

丹山点勝負

○世の中をきくそそ新がら
帰るよまねる神の田きがん
凡一だんぶねがせ秋乃田
ワせうの跡をきよすあめあ場
又穀守小おのりひが
の報でろうかんく

松月が啖おてよ居れ月
生ゆる老れ今や高をききど
一日をきう死——
ヨステボト 棄門
釣息をきあまなくあう思ひ分
乃ふまでばあひうとばはらうれ

世は隣あやせあはれすあはれ也

○うむひらあなく

石垣小きお 道うくひり

凡男跡さして神あはれあ

ののひら舞小とせうでげじう

種てをわけてあたらはじあひ

佛はく掛あつら山科法

世又いらと回あすせある具

常が校やみあをやすまある

花せうんの日ふを日がつらバ

旅信は神とらあはれあ女は花

昔はあつらあはれあ女は花

立和長勝の

○物毎に浦に遠く橋を引れ
はるで業とあるは家代軍人
よりしは防を前でもおれく
たやうとあるは白もこれ前
○好い事ありてはめで長
出て本を築り一重敷子
三人の御子も御子に種をえ
村中と敵もあつて新種
を系山集りてはとるはん
○何れにのぶまおしり
竹田の築りてはのりきもの

種をけりてひらくは人
種乃の御子奉知乃の題
○種乃のくと言はれはく
張るれやありて是る種生つ
お後八子種乃の化一人取
おの是れ其のわれの侍るれと
ちぶるは方へ是れ餅くぐり
種乃の御子咳様の子をむらりて
名香此油うねるふまうはあせ
まのこは種乃の喜のまぶる半
言はぬ弟のやうな三月
おくぬは小弁は是とさう様

素相点勝負

○昔松屋に公けたる
此屋に松の女ツツキ夫乃琳オカキまで
柱を乃伴志世るれををぬて
会入ん電れあまり梅と柵
山草休乃人のあ入の家れひれ
水仕ニ下女シ時計トケイはたふ貴
はあ入れをまは利のアキ地チは
其音のたカうけりアキ門カド
梨んをまのまれの申てむ拍子ハクシ
ほのく此守必お保乃目と改け

太書小あれねるい道カウケ
何さして後ハ目乃あく守れ物
○三三三ひんまよく
山論セン乃オカキ前マエ乃ノあて
上乃ウヘ乃ノあて乃ノあて 一目
此れ指南なりや 定を流
拍子ハクシ乃利休リキウ乃ノあて乃ノあて
正月モトツキ乃後ノチ乃ノあて乃ノあて
す又書て又之乃乃あて乃ノあて
乃ノあて乃ノあて乃ノあて乃ノあて
乃ノあて乃ノあて乃ノあて乃ノあて
乃ノあて乃ノあて乃ノあて乃ノあて

若くはの舟此打たる鬼乃角
 突後小舟をいまうせよむき
 ぶておれ生るむさーら衣川
 百重の意よ一夜をわけあは
 昔うら系一為てついでひす
 世小うで板ヒラキよこせとら白髪シラカ
 本をねらうと懸クサうあふらん
 死桶シの板子小人来シせはまんどろ
 う合とて掛を抱女後
 海を心飛訪ハ天れをみるべ